

権現様

列車が走り出して五分も経つと、それまで一面を覆っていた住宅街や、時々自らの存在を誇示する様に誇らしげに聳えていた高層ビルなどの姿も跡形もなく影を潜め、窓の向こうは一面の茶と緑の空間と化す。

線路に沿ってそこそこ整備された地域の主要道が伸び、道にしがみつ়く様にポツン、ポツンとまばらに建物が並んでいる以外は、一面を区画整理された田んぼと畑に覆い尽くされた風景は、幾ら都心への通勤圏内とは言っても片田舎の印象が強い。

列車は二つ、三つとこじんまりした造りの駅舎をすり抜けて、次の停車駅へと先を急ぐ。

都心へと向かう通勤客の群れを背にして反対方向へ向かうのだから、平日のラッシュアワーと言っても車内は鮎詰め……という程の混雑にならないのは幸いだったが、それでも吊り革に掴まる客の姿が珍しくない程度の混み具合ではあった。

「はあ～、ねむう……」

俺は戸口の脇に凭れかかる様にして、ぼんやりと窓の向こうに流れる景色に視線を漂わせながら、GWの休み癖が未だに抜けきらないダルさと眠気に半ば占拠されていた。

週休二日の仕事ではあるが、普段のペースとは違って一週間以上もの連休明けとなれば、一日～二日ではそう簡単に生活のリズムも回復しない。

更には、これまでどちらかといえば朝晩の冷え込む日が目立っていたのだが、GWを境にして一気に陽気が穏やかになって来た様な気がする。

それだけに、常に寝不足気味という生活習慣に馴らされた体には堪えるのだ。

「ふわあ～」

不意に襲い掛かる眠気に抗し切れずに、思わず大口を開けて欠伸を漏らしてしまう。

頭の中に白い靄が立ち込めた様な、あるいは蜘蛛の糸が張り巡らされて全ての動きが封じられてしまった様に、意識が朦朧としていた。

「間もなく〇×駅に到着致します……」

天井から流れる耳障りの悪い車内アナウンスに意識を引き戻され、もう一度軽く欠伸を漏らしてから強引に眠気を振り払う。

五月病とはよく言ったものだ。

今期から今の事業所に転勤になったのだが、一ヶ月もすれば職場の環境にも職務にも少しずつ慣れてくるものだ。

そうして現れた心の隙を巧みに突くようにして、適度に弛緩した緊張感と入れ代わりに襲い掛かる惰性と慢心の気持ちが、折からの心地よい気候と相俟って眠気を誘う要因になるのだろう。

列車が微かな振動を伴って駅舎に滑り込むと、俺は目の前の扉が開け放たれるタイミングを見計らって足を踏み出す。

その後に引き続いて押し出される様に人の波が列車の扉から流れ出るが、俺は背後を振り返りもせず、背後に僅かな注意を払いもせずに駅舎の階段を上がる。

駅周辺はいわば田舎の地方都市といった風情を見せていたが、駅から十五分程歩いた所に新興工業団地が築かれていた為に、工業団地内の企業に従事する通勤客の利用も多く、比較的この時間の駅構内は混雑しているのだ。

俺は未だに頭の中に巢食ったしつこい眠気を振り払い切れずに、どこか所在なくおぼろげな視線を漂わせながら、工業団地の敷地へと真っ直ぐに繋がる一本道の右端をトボトボと一人歩いていた。

工業団地とはいっても、もともと一面の農地だった場所が、時代の流れによって離農者が徐々に増加した影響で、虫食い痕の様に放置されていた土地を、新たな地域振興策として工業団地の建設と企業誘致が自治体主導で積極的に行われたものだ。

その為に、工業団地の周辺には未だに田んぼや畑といった農地が一面に広がっている。

そして、一本道の真正面には、周囲の風景とは異質な建物の集団が固まって立ち並んでいる。

その建物の向こうには更にのどかな田園風景が広がり、その遥か彼方に聳える山々の稜線が薄青い靄の中に飲み込まれていく。

「はぁ……こんなにいい天気の日、仕事なんてやってられないなぁ……」

まだ始業には少し早い時間ではあったが、様々な事故に巻き込まれる可能性を考えて、普段から早めに出勤する様に心掛けている。

その分、工業団地に向かうこの徒歩の時間は、大抵とろとろと春の息吹や土の香りを感じ、草花が思い思いの鮮やかな花卉で着飾る様を眺める事を、少々楽しみにしていたのだ。

前を行く人の影や、時々後ろから通り過ぎる人の影には一切囚われずに、道の周囲で自分の存在を実しやかにアピールしている自然の生き物達に視線を投げて、つかの間の心満たされるひと時を満喫していた。

そもそも、俺がこの事業所への転属を希望したのは、都心に近いとは言っても比較的多くの自然が残っているこの土地への密かな期待と、毎朝満員の通勤電車に押し込まれる生活に耐えかねていた事、比較的自宅から近い距離にある事業所であり、混雑する都心方面とは逆方向への通勤となるので、朝が楽になるだろう事が見込まれたからだった。

こう言うてしまうと、職務内容そのものにはまるで興味がないと受け取られてしまいそうだが、以前の職務をそのままこちらの事業所に引き継ぐというのも、転属を希望した大きな理由の一つだ。

しかし、職場は工業団地内だから、周辺には工場やら倉庫しかなく、工業団地の敷地を抜けると今度は一面の田畑……という訳で、これまでの様に『仕事帰りに職場の同僚と一杯……』や『帰りがけにショッピング』といった楽しみは奪われてしまった。

まあ、ショッピングは週末にでも都心の繁華街へ出かければ用が足りるし、帰りがけに居酒屋に立ち寄る習慣が無くなれば、健康にもいいし懐も痛まずに済むのだ。

何よりも、こちらの事業所に移って来てからは、殆どストレスが溜まる様な事態を経験しなくなった。

それによって、実は朝のラッシュアワーで毎日人の波に揉まれる生活が、如何に自分に

とって精神的なストレスとなっていたのかが再認識された。

もちろん、こちらの事業所に来れば来たで、今度は何か別のストレスに悩まされる事になるのかもしれないが。

俺は漠然とそんな事を頭に浮かべながら、朝の心地よい風に気分を燦らせていた。

——そういえば、このGWはこの周辺の散策でもしてやろうと思っていたのに、結局何もしないうちに終わってしまったなあ。

長期休暇とは得てしてそういうもので、最初は『休みはまだまだ長いから、今日でなくてもいいか……』と先送りしているうちに、いつの間にか過ぎ去ってしまうのだ。

そして、いざ休みが終わってから振り返ると、実は意味のある事を何もせずに無為に過ごしてしまったと後悔するのだ。

そんな事を毎回の様に繰り返す。

もっとも、そうやって先送りにしてしまう程度の事は、本当はそれ程重要でもないし、それ程やりたいと思っている訳ではない場合が大半なのだが。

ただ、何となく無駄に時間を過ごしてしまうのがとても勿体無く思えて、そんな選択をしてしまう自分を慰める為にそういった言い訳を後付で考えてしまうのだろう。

そんな余り意味もない事を延々と思い浮かべながら、それまでの惰性でとろとろと足を繰り出して、何となく周囲に視線を傾けている様に見えていても、実は余り周囲に関心がいついていない。

最初は周囲の自然の風景をただ何となく眺めていても、いつの間にか頭の奥から他愛もない考えが首をもたげ、そのうちそういった下らない事の方に関心が向いてしまって、いつの間にか周囲の風景などはどうでもよくなってしまう。

そしてふと気がつく、工業団地の入り口付近に辿り着いている……それがいつもの出勤パターンだった。

それにしても、今日はやけに工業団地が遠い気がする。

ふと、正面に意識を向けた俺は、目の前の思いがけぬ光景に、反射的に立ち止まってしまった。

「工業団地が……ない」

駅から農地を突き抜ける一本道の突き当たりを整備された県道が横切り、その向こう側に工業団地が広がっているのだから、どう考えても迷い様がない筈だ。

しかし、目の前には一面の農地が広がり、その先の緑の木々が生い茂った山に向かって、一本の砂利道が一直線に伸びている。

思わず背後を振り返った俺の視界には、その道の先に見えなくてはならない駅舎も、駅舎から左右に延びている筈の鉄道路線も全く映らなかった。

背後に広がるのは一面の農地だった。

「これは、一体？」

俺には何が何だか全く訳が分からなかった。

もう一度進行方向を向いて、再び背後を振り返る。

それから、一ヶ月以上も通勤に使い続けた道の、見慣れた筈の左右の景色に注意を向ける。

しかし、そこにはこれまで毎日の様に見慣れた風景はなかった。

どこかの山間の僻地の様だったが、今までに訪れた事も、見た事もない光景だった。

思わず腕時計に目をやると、既に十時を回っている。

始業時間を一時間も過ぎてしまった計算になる。

それにしても、一体ここはどこなのだろうか？

自分の置かれた状況を判断しかねて、呆然と周囲を見回すが、ここがどこなのかを示す手掛かりになりそうな物は見当たらない。

いや、正面の緑に覆われた山の麓の登山道と思しき小道の入り口に、立て看板を思わせる巨木の柱が突き立っており、その一面だけが平らに削られていた。

反射的にその木の柱に向かって小走りで駆け寄っていた。

木の柱に近づくにつれて、それはやはり立て看板の様な物である事が分かったが、遙か昔に墨で書かれたのであろう文字は、長年に渡って激しい雨風に晒された為か、薄く色褪せて殆ど読み取れなくなっていた。

しかし、近づいたり離れたり、左右に角度を変えたりしながら何とか読み取れた文字は『権現』の二文字だけだった。

『権現』といえば、日光東照宮の『東照大権現』……つまり徳川家康が有名だが、元々は『仏・菩薩が衆生を救うために種々の姿をとって権（かり）に現れること。また、その現れた権の姿。権化（ごんげ）。（広辞苑第五版参照）』を言うのだそうだ。

という事は、この山にも昔、仏や菩薩を思わせる様な人が現れたとか、活躍したといった伝説が残されていて、その人物を祀った社があるのだろうか？

「……そういえば」

俺は、昨日の昼食時に職場の同僚から聞いた話を思い出した。

その時は他愛もない雑談として何となく聞き流していたが、まさかこのような所である雑談が関わって来る事になるとは、その時点では夢にも思いつかなかったのだ。

＊

「……そういえば、〇×町で男が行方不明になったって話があっただろう？」

それは、昨日の昼食時に、食堂へ訪れた時の事だった。

こちらの事業所へ来てから知り合い、よく話をする様になった同僚が、俺の座っていた席の隣に座り込むなり、いきなり話しかけてきたのだ。

「ああ。何だったか、チラッとニュースで言っていた様な……」

「その話なんだけどさ、実は、昔から〇×町では時々行方不明者が出る事件が起きているんだってさ」

「へえー」

「でさ、それにまつわる昔話があって、古くからの地元の住民は『権現様の祟りだ』って噂しているらしい」

「ごんげんさまのあたりい？ 今時そんな祟りなんてある訳……」

「と、思うだろ？ 俺も最初はそう思ったんだけどさ、でも、その祟りにまつわる話ってのを聞いて見ると、ただの偶然とも思えないし、やっぱり科学技術全盛の現代でも、そういう話もあるのかなって思ったりして」

「ふうん」

「何だよ。その『興味ねえよ』ってあからさまな態度は……」

「そんな事言っても、祟りなんてあり得ないだろ？ そんな下らない子供騙しに付き合っている時間もないから」

「まあ、いいから聞けよ。俺も最初はそう思ったんだけどさ、その『権現様の祟り』の話と、ここ数十年の間に〇×町近辺で起きている行方不明事件の不思議な共通点を知れば、お前だってそうやって鼻で笑ってはいられなくなるって」

「そこまで言うなら、その『権現様の祟り』って話を聞かせてみろよ」

「ああ」

そうやって同僚はちらりと周囲を見回すと、顔を近づけて少々控えめな声で囁く様に話し始めた。

「それは、どうも戦国時代のいつだかの時期だったらしいんだけど、もっとずっと里に近い辺りの平野で合戦があって、その合戦の敗軍の将が、ここからもう少し先にある山の麓まで逃れて来たんだそうだ。で、その武将は瀕死の重傷を負って山の麓に倒れていたのだそうだけど、そのすぐ近くにあった山間の集落に住む農民が武将を助けてな、傷が癒えるまで看病をしたんだそうだ」

「それで、傷が治ったんだ……」

「まあ、治ったには治ったが、右足に後遺症が残って、走ったりは出来なかったらしい。で、その時、特に農民の娘が献身的に看病をしたとかで、二人はお互いに惹かれあっていった。ところが、武将は合戦で敵対していた軍からも追われる身だった事もあって、傷が癒えたのを気に集落を去ろうとしたんだ。しかし、その農民は武将の行く末を気遣い、特に好き合っていた娘が集落に留まる様に懇願したのだそうだ。結局、武将は集落に留まる事を決めて、その娘と夫婦になる事に決めたんだそうだ」

「で、その話のどこが祟りなんだ？」

「だから、まだ続きがあるんだって。その武将は山間の集落に隠棲して、苦しくはあったが面倒見のよい妻やその父と共にそれなりに楽しい生活を送っていた。武将はかつての合戦の影響で右足が不自由だったが、その分武士としての教育を受けていた事もあって、いつの間にか集落全体でも『知恵者』としての存在感を増していったんだそうだ。そのうち集落の子供達に文字を教え、学問を授け、肉体の鍛錬としての剣術の指導などもしていたらしい。つまり、その武将が学校の先生の様な事を始めた訳だ。それから、集落に起こった様々なトラブルの解決にも、武将の知識が生かされていたらしい。しかし、そういった

武将にとってよい時期はそう長くは続かなかった」

「で？」

「武将が怪我をするきっかけになった合戦があっただろう？ その合戦で敵方だった連中が、どうやらその一帯の支配権を確立したらしいんだ。そして、敵方だった軍の連中が、かつての合戦で敵対した軍の残党狩りを始めたんだ。当然、例の武将にも追っ手が差し向けられる。そもそものきっかけは、武将が『知恵者』として集落での存在感を高めた事にあった。その噂は当然集落の外にも伝わり、『集落に突如現れた知恵者とは何者だ？』という話になった。武将に敵軍の手が伸びる中、彼と共に暮らしていた妻とその父は、武将を何とか逃がそうとするのだが、結局武将は追っ手に捕らわれてしまう」

「なるほどね。で、その妻が祟ったって訳？」

「いや。追っ手に捕らえられた武将は、そのまま二度と集落には戻ってこなかった。元々が敵軍の残党だったのだから、きっとそのまま首を刎ねられてしまったんだろう。あの当時では然程珍しくもない事件だったんじゃないか？ そして、農家の親子を始めとした集落の住民は、武将の死を悼んでいたんだが、それから幾らも経たないうちに、今度は武将の妻に子供が宿っていた事が明らかになった。武将自身が連れ去られて、多分そのまま命を奪われてしまった事は、妻にとってもその父にとってもショックである事に代わりはなかったんだが、入れ替わる様にしてその子供を宿した事は思いがけぬ喜びでもあった。更にしばらく時間が過ぎて、実際にその子供が生まれて見ると、当然といえば当然なんだが、父である武将に顔形がそっくりだったそうだ。そこで、妻や集落の住民達は口を揃えて『父である武将の生まれ変わりだ』と信じて、その子を大切に育てていったらしい」

「ふうん。だったら、確かに悲しい経過は辿ったかもしれないけれど、最後に救いがあったんじゃない？」

「まあ待って。まだ続きがあるんだから。それから集落の住民は、行方不明になったままの武将を懐かしんで、最初に武将が負傷して倒れていたという山の中腹に小さな社を建てて、その社に武将が大切にしていた形見の脇差を祀ったんだそうだ。いつしか、社は『権現さん』と呼ばれる様になって、集落のいわば守り神の様な存在になった……」

「なるほど。それが『権現様の祟り』って話に繋がるんだ。でも、祟りはどこへいっちゃったんだ？」

「だから、そう先を急ぐなって。これからがその祟りの部分なんだから。で、それからしばらくして、武将の子供がかなり成長してからの事だ。ある時、里から二人の武将がわざわざ山間の集落を訪れて、息子を無理やり里に連れて行ってしまった。元々が領主と敵対していた武将の子供なのだから、将来への禍根を予め断つ為にはこの様な手段も必要だったのかも知れないが、その時点ではただ単に武将の血を引く子供というだけの繋がりしかなく、集落に溶け込んで農家の子供として育てられていたのだから、将来的にも領主に敵対する勢力になる可能性はほぼないといってもよかった。しかし、領主は将来への禍根を断つ為に徹底した敵対勢力の掃討を行なったんだ。その子は強引に里へ連行されたまま、二度とこの集落には戻ってこなかった。一度目には自分の愛する夫を奪われ、更に今度は

血を分けた息子まで奪われるで、母親は昼も夜もない程毎日泣き腫らして、そのまま体が衰弱して息絶えてしまったという。その父である農家の爺も、すぐに後を追う様に亡くなったんだそうだ」

「そうか……」

「それから程なく、隣の集落で急に金持ちになった男の噂が、その山間の集落にまで漏れ伝わってくる。問題は『なぜ急に金持ちになったのか？』という部分だったんだが、それがどうも、例の武将の子供の話聞きつけて、その情報を領主に売った為らしいんだ。しかし、それからしばらくして、その隣の集落の男が原因不明の病気にかかって急死した。更に間を置かずに、あの子を里へ連行した二人の武将も、原因不明の変死体として発見されたそうだ。集落では続発するそれらの事件を見て『権現さんの祟り』といって恐れてな、自分の集落だけには危害が及ばない様にと行って、集落で権現さんの霊を鎮める為の祭りなんかも行なったりして、権現さんその物が信仰対象となっていたんだ。それから、里の方や周辺の集落が飢饉に見舞われても、その集落だけは飢饉の影響を免れるといった事が何回もあった為に、集落では『権現さんが守ってくれている』という事で、より権現さんへの信仰が強まっていった。そんな状況が一変するのは、時代が移り変わって明治に入り、鉄道路線が引かれたり〇×駅が出来たりと、山間の半ば孤立した集落での生活が成り立たなくなってきたからだった」

「つまり、現代って事？」

「まあ、そういう事かな。時代を経るに従って交通機関も充実してきて、産業構造も根本から変わったりライフスタイルが変化したりで、それまで山間の集落に住んでいた人々が徐々に生活の便の良い平野部や都市部に移住し始めるんだ。そうすると山間部では過疎化が進行して、いつしか『権現さんのお祭り』も行なわれなくなり、権現さんの社自体が人手の入らなくなった山中に置き去りにされてしまう。そんな時に、〇×町を中心にした『権現さんの社』を取り囲む地域一帯で、突発的な行方不明事件が立て続いた。当初はそれぞれの事件が偶然で片付けられ、現在でも警察当局はそれぞれの行方不明事件を分けて考えている様だけど、古くからの地元の住民の間では『権現様の祟りじゃないのか？』といって、実しやかに囁かれつつも、当の社は放置されたまま現在に至っているそうだ」

「ふうん。でも、お前がそんな話に関心があるとは思わなかった」

「はは、俺もネットの聞きかじりだけど、職場のすぐ近くだし、何となく気になってググってて見つけたんだ」

「ネットって？」

「ああ、『W（わろす）ちゃんねる』のオカルト板だけど？」

「何だ、Wちゃんねるか……」

『Wちゃんねる』と聞いて、一瞬でも『権現様の祟り』話に興味を覚えてしまった自分に後悔した。

Wちゃんねるといえば、国内最大の掲示板サイトとして有名だ。

以前、俺も頻繁にアクセスしていた時期があったが、今では殆どいく機会もない。

確かに、時々他では見られない貴重な裏情報にお目にかかれるチャンスもあったが、大半は嘘とも真とも判断のつかないゴシップ記事や、具にもつかない非難や荒らしカキコの応酬ばかりで、最近は少々辟易していた所だった。

しかも、オカルト板といえ板の存在その物が怪しさブンブンである。

その為に、Wちゃんねると最後のネタばらしを聞いた所で、『きっと他愛もないガセネタだろう』とたかを括っていたのだが、実はあながち嘘でもガセでもないと言う事なのだろうか？

＊

「さて、どうするか……」

俺は、昨日の昼食時の他愛もない雑談を思い出しながら、今後の自分の身の振り方についての方針を決めかねていた。

まさか、原因不明の行方不明事件なんて、今のご時勢にそんな訳も分からない事態が起こる筈がないじゃないか……しかし、俺はいつの間にか訳の分からない山間の僻地に迷い込んでいる様だし、目の前の立て看板を思わせる木の柱には、おぼろげながら『……権現～』という文字が見て取れる。

俺が陥った状況を合理的に説明できる可能性としては、ぼんやりと余所見をしながら歩いているうちに、いつの間にか工業団地を通り抜けていて、そのまま更にしばらく歩き続けた末に、訳の分からぬ山間地に迷い込んでしまった……という事くらいだ。

それでも、『幾らぼんやりしていても、知らないうちに工業団地を通り過ぎてしまう筈がない』とか、『工業団地から見える山の麓に、たった一～二時間歩いた程度で辿り着けるとは思えない』といった不審点は目に付くのだが、この際細かな気になる点には敢えて触れない事にする。

それに、昨日同僚から聞いたWちゃんねる発の『権現様の祟り』ネタの信憑性も、どうも今一疑わしい。

それでも、〇×駅からしばらく歩いた所に聳える山の中腹にある『権現様の社』という話は、現在の自分が置かれている状況から考えても、最も無理なくこの奇怪な事態を説明出来る様に思える。

もし、この立て看板の先に伸びる細い道の先に、問題の『権現様の社』があるのだとしたら、ちょっと怖い反面少しだけでも覗いてみたいという興味も湧く。

しかし、そんな事をしている間にさっさと戻って、既に大幅な遅刻ではあるが仕事に行かなくては……と言う思いも同時に浮かんでくる。

同僚の話だけではよく分からない部分があるが、問題の『権現様』が本当に祟るのだとしたら、下手に触らないでこのまま戻った方がいいのだろうか？

俺はしばし迷った末、今日はこのまま一旦戻って、次の休みにでも日を改めて再度訪れる事にした。

幾ら目の山の中腹にあるかもしれない『権現様の社』が気になると言っても、今日は出勤日だし、GWが終わったばかりと言う事もある。

例え訳が分からない事情で無断遅刻してしまったとしても、そのまま欠勤するよりは会社に向かった方がまだマシだろう。

それに、同僚の話だけではハッキリとしない『権現様』に関する事情を、予め下調べしてから出直した方が、色々な意味で良い様な気がしたからだ。

俺は振り返って、次にもう一度ここを訪れる時には迷わない様に、周囲の景色を頭に焼き付けようと左右を振り向きながら、元来た道に戻った。

その道は一面の農地を真っ二つに切り裂いて、遙か彼方まで一直線に貫く様に続いていた。

時折道の左右に広がるのどかな景色に視線を漂わせながら、そのまま黙々と三十分も歩き続けたらどうか。

——あの山からもうどのくらい離れたらどうか？

何となく気になって振り返ると、俺のすぐ背中越しに太い木の柱が立ち、平らに削り取られたその表面には、墨で書いた様な『……権現～』の文字が殆ど消え入りそうなくらいおぼろげにぼんやりと浮かんでいる。

「あれ？」

俺は訳が分からずに、思わず前を見て、再び後ろを振り返った。

あれから三十分は歩いた筈なのに、例の立て看板の様な木の柱の元に戻って来てしまっている。

しかも、山の周囲をぐるっと回ったり、右や左へ曲がったりもしていないし、遙か先まで真っ直ぐに続く一本道を歩いていただけだから、山から離れる事はあっても近づく可能性はない筈だ。

しかし、先程立ち去った筈の立て看板の前に、いつの間にか戻って来てしまった。

「どうなっているんだ？」

俺は思わず、木の柱を背にして全速力で走り出していた。

自分が非現実的なとんでもない空間に放り出されてしまったのか、それとも未だに布団の中で趣味の悪い夢を延々と見続けているのか、もしくは〇×駅から工業団地へ向かう途中で突然白昼夢に襲われてしまったのか、とにかく、現実には起こり様のない出来事が自分の目の前で展開されており、その摩訶不思議な現実から逃れようと必死に足掻いていた。

いずれにしても、今実際に体験している現象は、夢であるが故に一見不可思議に思える事態が、あたかもその場で現実には起きていると錯覚しているだけだ。

そうとでも考えなければ、この説明不可能の出来事を合理的に説明出来る理由が見当たらない。

それとも、原因は何だか分からないが、俺の頭はいつの間にか何らかのショックを受けて狂ってしまったのか、それとも元々生まれつき何処かに異常のあったのが、今更になって表面化したのだろうか？

俺はそれらの考えに思考を奪われつつも、なぜか『自分が狂ってしまった』などという現実を受け入れたくなくて、ただひたすら走り続ける事に全ての意識を集中する様念じ続けた。

否、自分が狂ってしまったのではない。

きっと自分を取り囲む全ての物が、どこかトンでもない力の作用で奇妙に捻じ曲げられてしまい、俺はなす術もなくその中に閉じ込められてしまったに違いない。

たとえそちらの方が、絶望的なまでに自分が元いた世界への回帰を困難にするのだとしても、『自分自身が狂ってしまったのだ』と、いかにもあり得そうな、しかし精神的には受け入れ難い状況を認めてしまうよりは数万倍もマシだと感じていた。

とにかく、この狂った状況から一刻も早く逃れなくては、まるで蟻地獄の罠の深みに嵌ってしまった哀れな獲物の様に、最早二度と元いた世界に戻れなくなってしまう……現実世界への回帰の過程が、表面上どの様な経過を辿るかは別としても……。

俺は一心に足が纏れそうになる位懸命に、川砂利を敷き詰めただけの粗末な一本道を突っ切った。

真っ直ぐの一本道で、交差する農道も数本しかなかったし、その周辺には一面に見晴らしの良い農地が広がっていたから、どう考えても迷い様がなかった。

もちろん、この時は一刻も早く山の麓から離れるのに必死で、周囲の状況を一々気にかけている心の余裕もなかったのだが。

そのまま肺の奥が熱い悲鳴を上げて、喉が焼け付くくらいに息を切らしてから、『もうこれ以上走れない』とその場に倒れる様にしてへたり込んだ。

——はぁ、はぁ……。

大きく肩を上下に揺らして灼熱の塊と化した吐息を吐き出しつつ、耳の奥で荒々しく響き渡る鼓動が治まるのを待つ。

それからしばらくして、気道から肺にかけて詰まっていた物が少し解れかけて来た頃、よろよろと立ち上がって何気なく背後を振り返った俺の視界に、そこにはあってはならない物が飛び込んできた。

先程の、看板を思わせる木の柱だった。

——これは、一体どういう事なんだ？

今立ち上がったばかりのその場所に、俺の膝はガクガクと力が抜けて折れ曲がり、呆然とした表情のまま途方に暮れて座り込んでしまった。

やはり、幾らこの場所から離れようとしても、いつの間にかここに引き戻されてしまう様だった。

「はぁ……」

俺はあからさまに声を上げて吐息を漏らし、がっくりと首を落としてうな垂れたまま、しばらくは立ち上がる気力も湧かなかった。

自分が途轍もなくトンでもない事態に巻き込まれてしまっており、そこから強引に逃れようとジタバタしても、全く何の役にも立たないという事がわかってしまったからだ。

そして、多分これは自分の気が狂ってしまったとか、精神が錯乱しているとか、奇妙な夢を見て魘されているといった状態ではなくて、きっと今現在現実には体験している現象なのだという事も直感的に理解した。

この様な理解不明の不可解な現象を理屈で説明しろと言っても、その筋の専門家でもなければ、他人に理屈を捏ねる趣味も学もない自分には、現在の状況に合った適切な言葉を紡ぎ出せる筈もなかった。

ただ、自分自身の意識も感覚も正常であると、どこからともなく表れる直感がそう告げているので、例えそれが何の根拠もない単なる思い込みだとしても、今現在自分が置かれた状況の中では最も信頼できるものだった。

だとしたら、物理法則としてはあり得ない現象を体験してしまうこの場所自体が、何か特殊な環境に置かれているという事だろうか？

時間や空間が伸びたり縮んだりすると言ったのはアインシュタイン博士だったが、彼が提唱した理論は飽くまでも光速の九十数パーセントといった特殊な環境下で起こりうるという、現時点では検証のしようがない仮説に過ぎない。

しかし、俺が今実際に体験している状況は、人が走ってスタートからゴールへ真っ直ぐ向かったとしても、いつの間にかスタート地点に戻ってしまっている……もしくは、走っているつもりでも全然進んでいないと言う事だろうか。

何が起きているのかはともかく、この先何度もこの場所から離れようと足掻いてみた所で結果は目に見えていたし、時間と体力を無駄にして更に絶望を深めるだけと言う見通しは明らかだった。

仮に何らかの人智を超える力が働いているとして、その力は俺をこの場所に留めておきたいのだ。

もしくは留めておかなくてはならない、我々の理解を超えた何らかの理由があるのかもしれない。

俺の視線は、自然と目の前の木の柱の奥へ向かって細々と伸びる、多分噂の『権現様』への参道と思しき、細い獣道に注がれていた。

濃い緑に染め上げられた木々が鬱蒼と生い茂る山の、木々の切れ間を縫って細々と頼りなさ気に奥へと続いている道に目を凝らして、俺は軽く吐息を漏らした。

おぼろげな興味は湧いていたものの、もう少し下調べをした上で改めて出直そうと考えていた『権現様』だが、どうも自分は権現様に呼ばれている様な気がしたのだ。

果たしてその様な現実離れした事態が、実際に起こり得るのかどうかは分からない。

しかし、既に今までの経験やそこから得た常識を覆す事態に見舞われているのだ。

この先どの様な不可思議な事態に襲われたとしても、それは決してあり得ないのではなくて、ただ単に今まではそれを『現実には起こり得ない不可思議な現象』と認識していただけで、実はその認識の方が間違っていたのだ。

そこまで割り切って考えてしまえる程、後から考えればその時の俺は自棄になっていたのかもしれない。

とにかく、一度『権現様』に関心が向かうと、次第に一刻も早く『権現様を目の当たりにしたい』という感情に支配されていった。

昨日、同僚は『権現様の祟り』などと言ってはいたが、今の世の中、祟りなどと言う現象が現実にある筈がない。

そんなものは、きっと『人間の能力では認識不可能な、一見不条理に見える嫌な出来事に対して、自分自身の至らなさを棚上げにして自らを慰め、他人にその罪を擦り付ける為の言い訳として作られた夢幻と同様の現象』を差すのか、あるいは『怪しげなカルト宗教が信者を獲得し縛りつけ、自らの宗教ビジネスを成り立たせる為に作り上げた方便』に過ぎないのだろう。

まあ、いずれにしても、目の前に力なく細々と伸びる、今にも緑の森に消え入りそうな心許ない道の先にある筈の、今はどうなっているのか想像もつかない『権現様の社』に辿りつけば、何かしら分かる事もあるに違いない。

なぜならば、俺が意図せず『権現様の社』のすぐ近くに招き寄せられ、なおかつ不思議な力の作用によってその場から逃れる事も叶わないならば、焦点の『権現様』に何らかの鍵が仕組まれていると考えるのは、とても自然な成り行きではないだろうか。

俺の脚は、最初は少々戸惑いつつも、意を決して『権現様の社』への参道を、一步一步踏みしめる様にして登っていった。

＊

これは……。

細々とうねりながら山の頂上へ向かって伸びる獣道を辿って十分も登った頃、不意に前方の視界が開け、ちょっとした踊り場の様な広い空間が現れた。

晴れた日の昼間でも、天井を覆い尽くす濃い緑の木々の切れ間から、僅かに注ぐ木漏れ日が唯一の明かりである獣道と違って、この広間からは直接日の光が大地に降り注ぐので、それまでの陰鬱とした雰囲気が一瞬にして拭い去られる印象があった。

長く暗いトンネルをやっと潜り抜けた……そんな、ほっと一息つける空間がこの踊り場だった。

そして、広間の行く先には、更に山の頂上に向かって細く長い森のトンネルが延びている。

しかし、俺の目的地はどうやらこの広間の様だ。

——これが、問題の『権現様の社』なのか？

広間の片隅に慎ましく鎮座する木製の小さな社が、どちらかと言うとここに置き去りにされたと言う風に寂しげに一人腰を下ろし、長年に渡る激しい風雪に晒された影響を色濃く滲ませていた。

それは小さいながらも未だに社の形状を何とか維持してはいたが、全体的に腐食が進んで寄生虫の類いにも食い荒らされ、ほんの少しでも手をかければ跡形もなく灰燼に帰して

しまう程、脆く朽ち果てていた。

その余りに荒れ果てた惨状を目の当たりにして、『権現様の社』が俺をここに呼び寄せた理由が理解出来た様な気がした。

昨日同僚が聞かせてくれた話の真偽はともかくとして、今にも朽ち果てて跡形もなく消失してしまう事に耐え切れずに、是非社を修復してもらいたいと、そして願わくば人知れず打ち捨てられたままの状態に置くのではなくて、昔の様に人々の願いを叶える存在でありたいという『権現様』の思いが、これら一連の不可解な現象の理由なのだろう。

所々が苔生して緑色に変色し、また一部は腐食して朽ちたり、虫に食い荒らされて幾つもの穴が空けられていたが、それでもどこかしら『権現様の社』はほんのりと神々しい光に包まれている様にも見えた。

もちろん、そんなのはちょっとした日の光の加減か、単なる目の錯覚で片付けられる類いのものかもしれない。

しかし、俺には『この小さな朽ち果てた社には、今でも権現様が宿っている』と感じられた。

そう思いたったただけなのかもしれない。

それでも、俺がここに招き寄せられたのは偶然や気紛れなどでは決してなく、明らかに何らかの（多分権現様自身の）意図が働いていたのだろう。

俺は招き寄せられる様にして『権現様の社』の前に膝を折って、両手を合わせて目を閉じ、きっと何百年も昔からこの社に宿っているのだろう『権現様』の心を思って、静かに祈った。

その途端に、心の中に仄かに温かな灯りが点った様な気がした。

一面を明るく鮮やかに照らし出す太陽の光には到底及ばないけれども、それでも一切の灯りを閉ざされた地下数十メートルの洞窟の中でならば、きっと心強く輝く存在に違いない……そんな、一見頼りなさ気な、今にも消え入りそうな心の灯りが、今、自分の心の中に小さく点った。

その灯りからは、確かに『権現様』と呼ばれている者の真の姿が微かに垣間見えていた。

『権現様』と呼ばれる様になる遥か以前には、この地方一帯の覇を競って合戦に明け暮れる日々を送っていた武将であった。

しかし、その武将は心底から争いを求め、人を殺める事を生き甲斐としていた訳ではなくて、その時代の、その時置かれた武将の立場や環境が、武将を心ならずも殺伐とした合戦の場へ送り出したのだった。

案の定、望みもせぬ争い事に巻き込まれた武将は、自らが瀕死の重傷を負いつつもこの地に逃れ、そこで、終生添い遂げる事を誓う事になる女性との出会いがあった。

武将にとっては、争いに明け暮れる日々よりも、この片田舎で土と風に塗れてのんびりと生きる日々の方が性に合っていた。

しかも、武将の傍らには、片時も離れずに付き添って看病を続けてくれた女性がいる。

どちらからともなく二人は恋に落ち、武将の傷がすっかり癒えた時には、最早再び合戦

の場に足を踏み入れる意思を持っていなかった。

武将にとってはそちらの方が遥かに望みの生活に近かったし、何よりも彼の傍らには既
に守るべき人がいた。

かつての合戦に明け暮れた日々の中には、武将にとってそれに見合う程心を奪われた存
在はなかったのだ。

名もなき山間の集落でのひと時は、武将にとっては最も穏やかで和やかで、心満たされ
た幸せな日々であった。

そんな日々も長くは続かずに、武将はやがて命を絶たれてしまうのだけれども、彼の心
の中に常にあったのは、彼の妻となった最愛の女性に危害が及ばずに、自分が命を絶たれ
てしまった悲しみを乗り越えて、無事天寿を全うしてもらいたいと思った事、そして、今
や彼にとっての故郷ともなった山間の集落が、その後も天変地異や戦乱に見舞われる事無
く、安寧に過ごして行って欲しいという願いだった。

程なくしてこの場所に彼を祀った小さな社が建てられた。

その時、彼はこの社に宿り、生前の彼を忍んだ集落の住民が『きっと彼は菩薩様が姿を
変えて現れたに違いない』と言って、それ以降『権現さん』と呼んで集落の守り神の様な
扱いを受ける様になった。

『権現さん』にとっては、幸いにも妻が生前に自分の子を身籠っており、その子が無事
成長する様子をここから見守る事を何よりも楽しみにしていたらしい。

しかし、その息子が成人する時を待たずに、『権現さん』の子供であるというだけの理
由で、幼くして刑場の露と消えてしまう。

後を追う様にして、最愛の妻も立て続けに襲い掛かる悲しみに押し流され、見る見る体
が衰弱した末に、果てしない絶望に打ちひしがれたまま敢え無く息絶えてしまう。

もちろん、目の前で衰弱していく最愛の妻の姿を見届けなくてはならないのは、『権現
さん』にとっても悲しい出来事ではあったけれども、自分自身が『権現さん』に姿を変え
て存在していると言う事実を一つ取って見ても、人の死が全ての終わりではないという事
は明らかだったし、かつて最愛の妻や息子だった魂とも程なく再開し語り合う事さえ出来
るのだと思えば、今後へ向けての密かな楽しみさえ感じさせる事件でもあった。

この感覚は、きっと人としての人生を現在送っている最中の者には理解不可能に違いな
い筈だが、人が生涯を終えた時点でその先に何も残らないとしたら、後に残るのは時の流
れと共に朽ち果てるのを待つだけの哀れな屍だけだとしたら、今ここに『権現さん』とし
て存在する自分自身は一体何者なのか？

現時点では、当の『権現さん』自身にもその答えは見つけ出せなかった。

ただ、自分の最愛の人と、後にその人との間に育まれていたと発覚した新たな命の、人
生の行く末を見守りたいと言う思い、また合戦の敗残の将である自分を快く受け入れ、集
落の一員として家族同様の付き合いをしてくれた集落の住民達が、この先も安定して穏や
かな生活が営める様に、それだけを強く願った結果として、今こうして『権現さん』に姿
を変えているのだ。

『権現さん』の最愛の妻や息子、そして部外者の自分に強い親近感を抱いてくれた集落の住民達への強い思いが、俺の心の中に直接注ぎ込まれた様な気がした。

それはいわば、自分自身が『権現さん』と一体化した瞬間でもあった。

きっと数百年を経る間、『権現さん』が心の中に抱いてきた様々な思いが強い刺激となって俺の心を打ち震わせ、意図せず自分の中に込み上げてきたものの扱いに戸惑った俺自身の意識には関わり無く、次から次へと無尽蔵に溢れ出る思いが熱い塊となって零れ落ちた。

『権現様が祟る』なんて、トンでもない。

今俺が触れて共有している感覚が、『権現様』が数百年に渡って集落の住民の安らかで健やかな日々を願う思いだとしたら、少なくとも『権現様の祟り』とされてきたこれまでの様々な事件と『権現様』との関わりは皆無である……と自信を持って言える。

それ程までに権現様の思いは深く、穏やかで、温かく、その集落や自分を『権現様』として慕ってくれる全ての人々への慈しみに満ちていた。

——権現様が祟るなんて、絶対にあり得ない。

ほんの瞬間の触りだけだったかもしれないが、『権現様』の思いに触れた様な気がした俺の心には、直感的にその様な強い思いだけが残った。

＊

次の瞬間、俺の視界には一面を白色のモノトーンに塗り固めた天井と壁が映っていた。

「ここは……」

自分でも驚く程しわがれて掠れた声を辛うじて吐き出した時、一瞬遅れて傍らから清潔感のあるナースキャップを被った女性が覗き込んで来た。

その様子を見て、俺は『今病院にいるんだ……』と悟った。

聞く所によると、俺はその後、『権現様の社』がある筈の山の麓の道端に倒れていた所を、偶然近くを通りかかった地元の住民に発見され、この病院に搬送されたのだそうだ。

世間では俺が突如行方不明になったとしてちょっとした騒ぎになっていたのだそうだが、その翌日には発見された事で、それ程事態は大事にならないうちに収拾した。

病院には職場の同僚やら、比較的この病院の近くに住んでいる友人などがわざわざ見舞いに来てくれたのだが、彼らに『一体どうしたんだ？』と聞かれる度に、自分があの時に体験した事を全て正直に話して良いものかどうか迷ってしまった。

個人的には、絶対に『自分自身が精神的な異常を来たしてしまったのではなくて、全てが正真正銘の事実間違いのない』と確信しているのだが、一見あり得そうも無い不可思議な体験談を信じてくれるかどうか、とても疑わしかったからだ。

でも、たった一人だけ、俺に初めて『権現様の祟り』の話を聞かせてくれた同僚にだけは、自分が体験したありのままを話して聞かせる事にした。

その同僚も呆気にとられた様な『まさか！』という表情を始終浮かべていたが、無言で俺の話に耳を傾けていた。

『自分が体験しなくてはあの感覚は絶対に理解できまい』と、俺自身にも良く分かってたから、敢えて俺の体験談に対して同僚に意見を求めたり、その話を信じてもらおうと強要したりはしなかった。

でも、同僚は半ば狐につままれた様な思いを抱きながらも、敢えてそれには何とも応えず、ただ一言『そうか……』とだけ返した。

同僚には同僚なりに思う所があるのだろうが、俺もそれに対して敢えて深く問いかけたりはしなかった。

『権現様』については、本当に心の許せる、この話に真剣に耳を傾けてくれる人に対してでなければ、余り大っぴらにするべきではない……と思ったからだ。

それから二日して病院からも無事退院し、俺は再び職場に復帰した。

詳しい事情は知らされていない様だったが、俺が病院に入院していた事だけは周知されていたらしく、『大変だったね』『体の具合はもういいの?』などと、少し鬱陶しく感じる位に色々な人に気遣いの言葉をかけられた。

また、俺の行方不明について捜索願いが出ていたと言う事情もあって、地元の警察署に出頭して簡単な事情聴取も受けた。

警察では『俺が何らかの事件に巻き込まれた可能性もある』として、事件と事故の両面の可能性を想定した上で捜査を行っていたらしい。

基本的には余り『権現様』に関わる体験談をするべきではないという気持ちに変わりはなかったが、警察の事情聴取に対してだけは、質問された内容に沿って体験した真実をありのままに答えた。

担当の警察官も、『権現様』に関連する話のくだりでは少々首を捻っていた様だったが、ともかく俺の行方不明の件については、一応『事故』という扱いで決着した様だった。

それから瞬く間に一週間が過ぎ、二週間が過ぎ、もうすぐ月が変わろうとしていたとある週末の日に、俺は再びあの『権現様の社』を訪れた。

そこには、この前目の当たりにしたままの、半ば朽ちかけて単なる塵の塊に帰るのを待つばかりのみすぼらしい社がひっそりと立ち竦んでいた。

俺は半ば『権現様と一体化したあの時の感覚』を再び体感出来るかもと、密かに期待しつつ社の前に膝を折って静かに手を合わせたが、あの時の様に『権現様』は歩み寄って来てはくれなかった。

しかし、きっとこの社に『権現様』の魂は今も宿り続け、この付近の住民や、こうして『権現様』を慕って訪れる人が穏やかで安らかな日々を送れる様に、これまでと同じ様に願い続けているのだろう。

そして、なぜ『権現様』が俺をここまで呼び寄せたのか、その理由も今では何となく分かる様な気がする。

きっと、『権現様』はこの社が放置されたまま荒れるがままにされて、いつの間にかその存在すら忘れ去られてしまう事を残念に感じ、再び『権現様の社』を再建する役を俺に託したのだと思う。

権現様の実体は決して木製の社にある訳ではないけれども、この社の存在こそが『権現様がここに存在する』事を証明するシンボルなのだから、『権現様』の靈験に肖りたいと願う人があれば、ここを訪れて『権現様』に願を懸ければよいのだ。

その願いが『権現様』の根本に流れる深い慈しみの心に反しない限り、きっと『権現様』はその願いを叶える為に最大限の助力を与えてくれるに違いない。

それからもう一つ、もしかしたら『権現様』は人恋しかったのかもしれない。

誰でも良いから、時々は人と話をしたり、触れ合ったりしたいと考えたのかもしれない。

これは単なる想像でしかないけれども、『権現様』は生前も、そしてこの社に宿って『権現さん』と呼ばれる様になってからも、時折人によってとても酷い目にあって来た。

そして今も、かつての『権現様』による陰からの守護の力による安寧な日々を忘れて、いつの間にかこうして山の中に忘れ去られてしまっている。

しかし、それと同じくらい人と触れ合う事で得るものもあり、自分自身が『権現様』となっても尚成長する為の糧を得る事が出来た。

多少酷い目にあったり、忘れ去られそうになったとしても、『しょうがないなあ……』と親が道理の分からない子供を見守る心情を抱く事はあっても、それを恨んだり祟ったりといった思いとは常に無縁だった。

『権現様』は、世の中の物事の道理を人よりも深く理解していたし、何よりも『権現様』は、その程度で呆気なく人に対する守護を諦めてしまう程度の、浅い考えの持ち主ではなかった。

それだけ人に対する愛着が深かったのかもしれない。

そして、俺は縁あって、その『権現様』に、自分の存在を人々に知らせる為の象徴である社の再建を託されたのだ。

どうすればいいのかなんて、全く分からなかった。

でも、こうして『権現様』に導かれてここへ辿りついたのだから、是非俺が『権現様』の意を汲み取って社の再建に尽力するべきだし、そうしなくてはならないと言う思いが強く沸き上がった。

一刻も早く、『権現様』に真新しい社に落ち着いてもらいたい……俺の心の中で、微かに『権現様』が微笑み返した様な気がした。

(了)

HP 【Blankfolder】

<http://blankfolder.huuryuu.com/>

<http://blankfolder.blog.shinobi.jp/>

Copyright(C) 2006-2007 【Blankfolder】 こりん, All Rights Reserved.

本ファイルの二次配布はご遠慮下さい。

本作品へのお問い合わせは上記 HP にて受け付けております。

本作品に対するご意見、ご感想は上記 Blog でもお受けしております。